

# 一九六六年の瀬戸内晴美

——四四歳 出会いと別れ、岐路の年

竹内 紀子

はじめに

一九六六年。瀬戸内寂聴（出家前は晴美）は四四歳。四〇歳のとき「夏の終り」で第二回女流文学賞を受賞以来、ひきもきらない注文を受け、どんな仕事も断らず、引き受けている。

日本大学芸術学部非常勤講師として「創作論」を講義、月刊雑誌の連載を五本、週刊誌連載小説「朝な朝な」に続いて「夜の会話」、新聞小説「彼女の夫たち」などをこなし、毎月のように文芸雑誌に短編を発表もする、売れっ子の作家であった。

毎月のように三泊四日の地方での講演にも出かけ、前年連載の終わった『美は乱調にあり』など、九冊の単行本を出し、『瀬戸内晴美自選作品』（雪華社 全四巻）の刊行も始まった。体

力も仕事量もピークの時であったといえよう。同居している「涼太」の気持はいっそう離れ、仲はギクシヤクするが、その気持を振り払うように、よけい仕事に集中してしまう晴美であった。

この年は四月に井上光晴と出会い、秋には「涼太」が家を出て、会社の部下の女性と結婚する。晴美は京都に家を買ひ、同居していた東京・中野の家を出て、京都を本拠とする暮らしを始める。

そして自身の半生を綴る自伝小説『いずこより』を書き始めた年であった。二年半の連載の最後には、出家遁世に憧れる自分を見出している。

ここでは、晴美の人生に影響を与えた著名な芸術家たちとの交友をとりあげつつ、この年のできごとを紹介してゆく。

## 一月二九日 岡本太郎（一九一〇—一九九六）

岡本邸でグラビア撮影をしている。ペランダに笑顔で立つ二人。晴美は着物、太郎はセーター姿である。題は「ファン同志」。

岡本太郎とは、晴美が太郎の母である岡本かの子を描いた『かの子撩乱』を通じて互いの信頼を得、親しくなった。太郎は一一歳上である。晴美についての談話で、太郎はこう述べている。

「女らしさをぶちまける。平気で。こんなに女らしいのに、そのくせ、女のいやみをコレッポッチも感じさせないのだ。デリカシーが爽やかな笑いに包まれて、清潔である。女房にもつたら理想的な人だ、と思うのだが一人でおくのは、まことに勿体ない。」

晴美は太郎のことを

「人間的魅力は、「純粹」の一語に尽きる。男性としての魅力は大人と子供の同居した「頼もしさと頼りなさ」にある。容貌の魅力は「目」に集まる。太郎氏ほどデリケートで優しい心情の男を他に見かけない。私がプロポーズしないのは情事のぐちまめで云える稀有な友人を失うのがひとえに惜しいからである。」

と述べている。

これに続いて「別冊文藝春秋」七月号では、「わが憩いの場」と題して、晴美が太郎の製作現場（岡本邸の庭）に出かけて、着物姿で、太郎氏製作の椅子に腰かけている。後方ノミを持った製作中の太郎氏が立っていて、「太陽の塔」の顔をもつ釣鐘が映っている。晴美がコメントを書いている。

『この鐘は太陽の鐘というんだ。アポロは太郎だ』豪快とも無邪気とも挨拶のしようがないことばである。ご存じ岡本太郎の二つめの釣鐘が、伊豆の葦山のドライブウェイにぶらさがるのだそう。いつでも太陽のいっぱい輝いている岡本邸の庭は、ヘンな動物や植物やトボケた椅子がごろごろしていて、坐る場所にかかかない。たいていそこでは、何かしら新しい作品が造られている。憩いにいって、もりもり活力を刺激されるエーテルがこの庭にみなぎっている。生きてるのがしんどくなったり、小説を書くのが厭になったり、何となくヒスめいて来ると、この庭を訪れる。不思議に神経が安らぎ陽気になり、世の中がたちまち単純明快に見えてくる。」

何かあっても、太郎氏に会うと気が晴れ、創作の刺激を受けるのだろう。

太郎の死後、一年が経ち、日本経済新聞に連載した『奇縁まんだら』の中で寂聴は書いている。万博が近づいた頃のこと。

ある日突然、太郎さんが岡本家の応接間で私に言った。

「きみはいつも着物だから、畳の部屋がいいね。六畳でいいから？」

何のことかわからず、きよとんとしていると、

「そろそろ、きみもここへ来てほくの仕事を手伝うといい。

平野くん（敏子さん）もとても忙しくて大変なんだよ。書

くパートだけでもきみがしてやればいい」

私は仰天した。とんでもない。これでも一国一城の主のつもりだからと断ると、

「バツカだなあ。つまらん小説書いてるより、世界の天才岡本太郎の芸術を助ける方がずっと女として生き甲斐があるのに！」

と軽蔑されてしまった。

平野敏子という秘書であり、なくてはならぬパートナーの存在を晴美は認識していた。

また、晴美が影響を受けた岡本太郎の言葉として

「芸術家は、人生の岐路に立った時、必ず楽な路を選ばず、危険だと思ふ路を進むべきだ」がある。その言葉に、常に従ってきたという。ただし、「芸術家は、よ」と私たち塾生には言うのであった。

## 二月一四日 宮田文子（一八八八～一九六六）

宮田文子に招かれて帝国ホテルの部屋を訪ねている。会うのは二度目である。

晴美が宮田文子に初めて会ったのは前年、一九六五年の秋。文子が晴美に会いたがっていると編集者が伝えてくれ、喜び勇んで滞在中の帝国ホテルへ出かけていった。

晴美の記憶の中には、宮田文子というより、武林無想庵夫人文子として、強く生き続けていた人だった。『美は乱調にあり』で描いた辻潤と並ぶダイスト武林無想庵と結婚し、娘イヴォンヌを産んでいる。

宮田文子は旧姓中平文子で、松山市出身。女優を志して坪内逍遙の文芸協会に属した後、新聞記者になって潜入ルポを度々書き、大きな反響を呼んでいる。波瀾万丈の末、四十代で貿易商の宮田耕三と四度目の結婚をしベルギーに住んでいるが、一年に二、三度東京に来て、新しい事業を計画するのを生きがいにしていてた。

文子は七七歳になっていたが、紫のワンピースに紫のネックレスをつけ、濃化粧で三〇歳は若く見えたという。七〇歳でヒマラヤ山中のフンザ王国へ出かけていったり、たわしで肌をこ

する美容法をとなえたりして、センセーショナルな動きをしていた。帝国ホテルの部屋にはミシンを持ちこみ、洗面所に電気コンロを入れて調理し、おいしい料理を御馳走してくれた。自慢のフォアグラはパリで食べたどれよりも美味しかったという。

文子は夫の耕三のことを

「この結婚もどうせあたしのことだから続きやしないと、三年契約にしたのよ。それがとうとう三〇年もつづいちゃった。あたしの長い放浪の生涯で拾いものといったら、宮田だけよ。ジイサンとはもう死ぬまでいっしょにいるつもりよ」と語った。

晩年親交の厚かった宇野千代さんは、

「文子さんにはもつたない夫ですよ。神さまみたいにいい人よ。したい放題してあんないい夫に恵まれるなんて、ほんとに強運の人ですね」と語っている。

この頃、晴美は『美は乱調にあり』を「文藝春秋」に連載していた。それゆえ文子は晴美に会いたかったのかも知れない。晴美が着ていた小紋の着物をほめ、

「イヴォンヌが、あなたと同じ年頃なの。そんな着物、着せてやったら似合うんだけどなあ」とつぶやいたので、晴美はその着物を譲ったという。しかし間もなく、一二月二五日にイヴォンヌ

はパリで急死している。

その半年後の六月、文子も脳溢血で倒れ亡くなってしまおうのである。

文子の死顔は、また四十年代にかえったように美しかったと書いている。死化粧は宇野千代さんがしてあげたという。

イヴォンヌは辻潤と伊藤野枝の長男、辻まことと結婚し三児をもうけ、長女竹久野生<sup>のぶ</sup>は二十代でコロンビアに移住し、画家となつて活躍している。

野枝没後九〇年に徳島県立文学書道館で開催した「美は乱調にあり展」では、野生さんの作品、父である辻まことの絵画を展示し、寂聴と野生さんの対談も実現した。

また寂聴が晩年、寂庵の分院として設けた徳島県鳴門市のナルト・サンガに、野生さんは滞在し、展覧会を開催したこともあった。寂聴も辻潤・伊藤野枝、武林無想庵・宮田文子の孫である野生さんとめぐり逢えたことには、ひとしおの感慨を覚え、文子を訪ねた日のことを語ったことだろう。そして海外に居住し、時々日本各地で展覧会を開催している野生さんは、確かに祖母、文子の血を受け継いでいる。

出典 「宮田文子さんの死顔」(東京新聞夕刊 一九六六年六月二八日)・

『奇縁まんだら 終り』

## 四月一二日 井上光晴（一九二六～一九九二）

ほんとうに明るい人が出家などするだろうか。

（『草笈』）

四月一二日、井上光晴と出会う。

講演会が高松市であり、早朝、編集者が中野本町通りにある晴美の自宅近くにハイヤーで迎えに来た。羽田発八時五分の飛行機に乗る予定である。井上光晴が先に乗っていた。この講演会のもう一人の登壇者は大江健三郎である。大江は空路をとらなかつた。

初対面のときのことを井上は語っている。晴美が水色地に菱形の花びらのついた琉球紅型の縮緬の着物を着ていたことも、サフラン色の帯を締めていたことも覚えていた。

「気持が悪いわね。女の着るものにそんなに興味があるの」「そうでもないさ、ただ、あの時の着物とあなたの顔の表情があんまりちぐはぐだったから印象に残っているだけ」「ちぐはぐって」

「着物ばかり華やかで、表情が不幸を絵に描いたようだったからさ」

私は返す言葉もなかつた。

「人は誰でもあなたのことを明るいつていうけど、俺は明るいなんて思ったことないな、はじめて逢ったあの時から」

以後、井上とは男女の関係となり、出家後は友人にかえり、井上の死まで続いた。

同じ五月一日生まれで、片方は四歳の子を捨て、片方は四歳のときに母に捨てられたと、井上は酔うと口に出した。井上が四歳下で容赦なくけんかをしていた。対等にものがいえる相手、晴美の本質をわかってくれる男。反権力の姿勢でものを書く井上を晴美は尊敬しつつ、家庭をしっかりと守りながらも、常に女性の影がある井上に、どこかあきらめも持っていたことだろう。

一九八二年から、徳島で開催され、寂聴が講師を招いた「徳島塾」（三年間）では、一番目に井上が招待された。阿波踊りにも夫婦そろって駆けつけ、楽しく寂聴と共に踊った。

井上は闘病の末、六六歳で亡くなり、遺骨は数年間自宅におかれていたが、寂聴が住職を務めていた岩手県天台寺の墓に納骨された。妻・郁子さんは井上没後二二年を経た二〇一四年に亡くなり、同じ墓に眠っている。

寂聴はそれから七年後に亡くなり、やはり天台寺の井上の墓近くに眠っている。

## 七月 島尾敏雄（一九一七～一九八六）

晴美は婦人雑誌から大島紬の取材を依頼され、一三日から一七日まで奄美大島を訪れる。

その際、名瀬市の鹿児島県立図書館奄美分館の館長をしていた島尾敏雄にはじめて会う。大きな図書館を案内してもらった場面が、『奇縁まんだら 続』にある。

びっしり並んだ書棚の間の通路は狭く、二人並ぶと体がぶつかりあう。私は島尾さんの前になつたり、背後になつたりしながら、ただ歩きつづけた。たちまち私は島尾さんの男臭さに息がつまりそうになつた。体臭ではない。その人からかもし出される雰囲気、男臭く色っぽく煽情的なのだ。ミホさんが気が狂うまで愛した意味がわかつた。存在そのものに色気がある人物なのだ。

図書館を出るとき、右の頬に何かひりひりするものを感じる。

思わず右手を見ると、そこにこちら向きに建っている館長の細長い住居の端の窓がごく細目に開き、その間から刺すような視線が送られていた。私はその目を見た瞬間、窓がびしゃっと閉められた。まだ病的なミホさんの黒い瞳で

あつた。

その夜、島の名士たちから料亭に招待された。ミホさんの名で、見事な果物の盛り籠が晴美あてに届いていた。島尾さんも出席した。昼間のきりつとした白いスーツ姿とは違って、青い半袖のペラペラしたシャツだった。接待役の女の人から「ミホさんが嫉きもちやきで、夜の席にはおよそ似合わないものばかり着せるんですよ」と教えてくれた。

ミホさんにしたら、昼間、島尾さんが白いスーツを着て、狭い図書館の通路を晴美と歩いたことも許せないのだろう。

ミホさんの窓から刺すような視線といい、島尾さんの存在自体が色っぽく男臭いという表現も印象的である。

特攻を控えた海軍少尉と小学校の教師として出会った美男美女の二人。キャラクターの個性が強烈すぎて、穏やかな日常を営めなかつたのであろう。夫婦の修羅を描いた島尾さんの代表作『死の棘』で知られるが、このとき島尾さん四九歳、ミホさん四七歳。ミホさんは夫の浮気が原因で狂気を示し、入院治療したが完治せず、名瀬市に一〇年前から移住し、小説も書き始めていた。

このとき晴美は、涼太とは同居しながら心が離れつつ、新たに出会った井上とのつきあいが始まった不安定な時期であつた。

## 九月 ボーヴォワール（一九〇八〜一九八六）

フランスの作家、シモーヌ・ド・ボーヴォワールがジャン＝

ポール・サルトル（一九〇五〜一九八〇）と二八日、来日した。

晴美は九月二〇日、慶応大学で開催された講演会に参加し、一〇月一四日には「婦人公論」主催の座談会に出席し、ボーヴォワールと言葉を交わしている。

晴美は、講演の様子を「ボーヴォワールの赤いツメ」と題した文章で報告している（東京新聞 九月二四日）。

「女性と今日の問題」という演題で講演をはじめたボーヴォワールの声は、力強く、はりがあつて、聴衆の心をいきなりしつかりとつかみとるようだった。容ぼうよりもスタイルよりも、声が最も若々しくみずみずしい。（中略）時々、ほんの少し、机の上の両手で、ひかえめなジェスチアをとる。その細い長い指の先に、真紅のマニキュアがほどこされていて、薄いくちびるの口紅と、同じ色をしているのが美しかった。

話の内容は、第二の性に書かれていることで、女が経済的独立をしないかぎり、真の男女平等などはあり得ないし、最近の、女を家庭にかえそうとする後退の風潮と、女はあ

くまでたたかわねばならないという主旨で、別に珍しいことも、特にはつとさせられることもなかった。

私が講演をさせられる時に、いつでも主題にしている問題だし、繰りかえし、いいつづけてきた問題だったので、日本の女流作家もボーヴォワール並みかとうぬぼれたとたん、私は、自分がそういう考えを持ち、女の生き方、女の将来の立ち場に対して、そうあらねばならないという確信を持ち、まず自分自身をそうあらしめようと努めてきたその根本は、ボーヴォワールの「第二の性」を読み、開眼させられ、信仰に近い信念としていつのまにか自分の精神の根に定着させていたことに気づいた。

家を出て、ペン一本で生きている晴美の精神的な土台としてボーヴォワールがいたことが明言されている。サルトルとの結婚という形をとらない関係も、日ごろから、男と女の最高の理想的な結びつきの標本であこがれているとも書いている。

一〇月一四日の「婦人公論」の座談会のテーマは「第二の性はいかに生きるか」で、出席者は家裁の大浜英子、医者竹村幸子、東大助教授の中根千枝、作家平林たい子、そして瀬戸内晴美で、ボーヴォワールの滞日中、常に行動を共にした朝吹登水子氏も同席され、記録を残している。

ポーヴォワールは、フランスで人工妊娠中絶は禁止されていたため、いろいろ悲劇が起こっていて、このことを話題の中心にしていた。

「日本はとても易々墮ろせるでしょ。フランスは、それはもう厳しいんです。でも産む自由と産まない自由は同等であるべきです」(『奇縁まんたら 終り』)

晴美は、「愛する人の子どもを産もうというお気持は持たれなかったのでしょうか」と質問している。

ポ女史 サルトルも私も、おたがい愛し合っていますけれども、どうしても子どもがほしいという強い気持に、二人ともならなかったのです。それは二人とも著作をしたいという気持が強かったからだと思います。天職を持つということと、子どもを作るといことは、今の社会では、両立しないと思います。

(朝吹登水子『サルトル、ポーヴォワールとの28日間―日本』)

このことについて、のちに晴美は書いています。

互いの創作活動のために二人の子供をあえて産まなかったという生活も、果して、女として、人間として、幸福かどうかとも疑問がありません。それでもポーヴォワールが

身をもって、女のひとつの新しい生き方を試み、勇敢にひとつの突破口を開いてみせてくれたということだけは認めざるを得ないのではないのでしょうか。何れにしても、今世紀の上で、女のために、彼女のために、彼女ほど真剣に考え、書き行動してくれた人は少ないと思います。

(『ポーヴォワールの文学 その女性論絵模様』「ザ・ハイスクール・ライフ」六八年一月一日)

ポーヴォワールと同じように、晴美も女性の生き方を真剣に考え、身をもって新しい生き方を試み、勇敢にひとつの突破口を開いた。晴美のあこがれ、お手本はフランスにいたといえよう。

『奇縁まんたら 終り』に

若い頃、ポーヴォワールの『第二の性』は、私にとって聖書のようなものだった。

「人は女に生まれるのではない。女になるのだ」

という至極当然のことが、ポーヴォワールに書かれてはじめて天の啓示のようにきらめいてきた。私の戦後の生き方を決定づけたものは、坂口安吾の「墮落論」とポーヴォワールの『第二の性』とあってよい。

と書いている。

## 一〇月 『かの子撩乱』舞台化

### —新田亀三氏を招く—

晴美が原作を書いた『かの子撩乱』（一九六二年七月〜六年六月「婦人画報」連載、六五年五月講談社刊）が芸術座で上演された（一〜二六日、小幡欣治脚色・阿部広次演出）。

『週刊文春』一〇月一七日号では、主演の京塚昌子に対し、晴美は「上品で綺麗なかの子だ」と讃辞を呈し、「よくこまめで劇化してくれました」、「なにしろ有吉佐和子さんが泣いたのよ」と言い、切符五〇枚を買ったと報じている。

晴美は『かの子撩乱』の登場人物で、かの子が恋し、勤務していた病院に度々会いに出かけ、自宅に同居することになった新田亀三氏にも連絡をとり、招待した。

『かの子撩乱』執筆中、晴美はいきなり故郷の飛騨で病院を経営している新田氏を訪ね、かの子の想い出を話してもらった。身震いするような手応えを感じたという。

「生きるということの意味の本当のものは、いかに一つのことと真剣に、命がけでとりにくむかということでしょう。真剣に、一瞬一瞬生命の火を完全に燃やしつつける緊張した生活をするでしょう。でも人間はほとんどそんな真

実の生活をしらずに死んでゆく人の方が多んじゃないですかね。少なくともわたしは……かの子と暮したあの頃だけは本当に、人生に命がけで真剣な生活をしましたからねえ。あんなことつてありませんよ。もう二度とありません。でも素晴らしい『時』でしたよ。ああいう時を持ったということだけでも、私はよかったです」

（『かの子撩乱』第六章 桃源）

新田氏は上京し、かぶりつきの真中の席で観劇された。終わった時、新田氏の目に涙がたまっていて、恥かしそうに笑っていたという。

「あんまりかの子に似ていて、胸が一杯になりました。なつかしくて」（『私解説』）

## 十一月 文士劇出演（芸者幾松役）と 京都への引越し

二九日、東京宝塚劇場で「文藝春秋祭り—文士劇」が開催され、歌舞伎の当たり狂言「近江源氏先陣館—盛綱陣屋の場」と司馬遼太郎作「竜馬がゆく」の二作が演じられた。

晴美は昨年に続いての二度目の出演で、「竜馬がゆく」の芸



サンケイ新聞（一九六六年二月二八日）に寄稿した「引越し病」の中では、たいいてい引越しが年の瀬になることについて書いてある。

私の古い感覚のなかに、正月からはすべてが一掃するといふ考えが頑固に巣くっているせいかもしれない。自分の生活にしみついてきた垢や、おぎなりの習慣を、ぱっと、年末を区切りにして何もかもかき落とし、洗い流してしまいたいという欲求にとりつかれるのである。

（中略）

昔の作家は、破滅型とか何とかよばれて、生活技術はいたって下手で、果ては、要領の悪い恋に足をとられて情死したり、思いがけない人間に利用されて、世間をせびめたりということが多かつたが、今では作家はまるで、良識の代表者みたいな扱いを受けているし、事実そういう破たんも波風もたたない生活を送る人が多くなっている。

私は根に、放浪性と同時に、まことに古い文士気質を残存しているらしい。それを時々困ったことにも思うけれどまあこの気持ちの残っているかぎりには、失敗ばかりしながら下手な引越し貧乏を死ぬまでつづけて、それによって生じる危機感から、小説を生むエネルギーをとりたいたいの

と思っている。

自分で居を変えて、気分を一新した。晴美流の新しく生きるための方法である。常に変革が続けるのが芸術家であると考えていて、じつと同じ状態でとどまることを好まない。思いついたら行動に移すのが晴美である。

## 一二月 『さずこより』連載開始

自伝小説『さずこより』（当時は「さずこより」）は六七年一月号から「主婦の友」に連載を始めた。発売は一二月である。

連載のきっかけは「主婦の友」社長の石川数雄氏に自分の伝記を書いてみないかとすすめられたことにある。石川氏とは晴美がバロン薩摩のことを短編小説「ゆきてかえらぬ」で書くときの取材で出会う。薩摩家全盛時代、駿河台一帯が薩摩家の地所で、屋敷は当時の主婦の友社のあるあたりにあったことがわかり、社長に話を聞きに行ったのである。その後、度々会う機会を作ってくれ、執筆を辞退する晴美に

「仕事というのは手馴れたものでなく、いつでも手ごわいと感じるくらいのもものに体当たりしないと、どんな分野でも才能を伸ばすことは出来ませんよ。あなたは、今、まさ

に、自伝を書いて、自分が何者であるか、なぜ小説家なのかということを見つめ、考え直す時期にさしかかっているのですよ。私はあなたの才能にも前途にも、大いに期待しています。出版人としてプロの私の言うことを信じて自信を持ちなさい」(『私解説』)

と煽動し続けたという。そのうちに晴美も根負けして連載を約束した。その時期、「涼太」との関係を清算し、中野から京都に居を移すという、本人にとっては崖っぷちに追い詰められていながらも、引き受けたのは、自分自身が新しく出直したいという願望を秘めていたのかもしれないとも書いている。

自伝を書くには早すぎると思ったが、書くこと決めた以上は、夫のもとにおいてきた一人娘のために、こんなふうには母は生きたと、正直な遺言を残そうと、覚悟が定まってきたという。

この頃から中間雑誌の注文を断るようになり、「いずこより」の二年半の期間に、純文学中心の仕事にきりかえることができた。

「いずこより」の終盤に「出家遁世と放浪は、いまや私のもっとも深い憧れとなって、日夜、心をそそのかしてくる」という文章がある。いつの間にか、自分の書いた作品にうながされて、出家遁世という日本古来の文人の身の終わり方に憧れを抱くよ

うになっていた。

二年半の歳月をかけて、「いずこより」は私の前途に、出家への門に導いてくれようとしていたのだ。(『私解説』)  
『いずこより』を書き上げた四年半後、晴美は平泉中尊寺で出家する。五一歳であった。

## おわりに

六六年から六七年にかけて一年間連載した新聞小説『彼女の夫たち』(六八年刊)は四姉妹の恋愛・結婚生活を描いている。終盤、夫とも若い恋人とも別れ、新しい仕事に情熱を燃やす、長女で書道家の和美はこう考える。

和美は自分を支えているものが、炎と水のような気がするのだった。炎だけの情熱ですべてを焼き尽くして悔いなくった自分の半生を、和美は決して後悔していない。

けれども、人間には自分の気づかない何かの摂理に動かされ、水のような静かなくせに絶対に強い力を持って、あらゆるものをのみつくし、あわせとって押し流していく運命のようなものからのがれることが出来ないのではあるまいかとも思われるのである。

そして、自分の中に水のなめらかさ、柔軟さ、激しさ、恐ろしさという水の性をあわせもつていきたいと考える。

この「炎と水」は、晴美の先を予言しているかのようである。炎を燃やし尽くしたあと、別次元の水の世界で生きるという生き方もある。それは自らの極限まで到達しなければ訪れない世界かもしれない。

晴美はギリギリのところまで仕事をし、宿命の男との別れも経験した。そして自伝を書き始めて、今まで振り返りもしなかった幼い頃や、新婚時代の北京での生活、敗戦のショックや命がらがらの引き揚げを思い出して書くことができた。

その過程で、どうして自分は家庭を捨てたのか、何を書きたかったのか、これからどう生きようかを考えたのだろう。

前出の小説で、離婚して洋裁で生きていこうとする次女について

かえって、伸子のような女が、はじめから結婚しないで自分の仕事に打ちこんでいたら成功したかもしれない。

自分の中の才能の可能性を見きわめる能力が、人生のはじめに与えられていないということが女の幸、不幸を決定的なものにしてしまう。

と自らの生涯をかえりみて書いているかのようである。

誰にもわからない自らの才能であり、切り拓こうと努力しなければ開花しないものでもあるだろう。

ほぼ六〇年前の文章であるから、女性の自立は難しく、家事は女性がするものという前提で書かれてもいる。

男女ともに同じように、その才能を生かそうとする時代が近づきつつあるが、まだまだ難しい。社会の仕組み、育ってきた経験や「常識」があるにせよ、大事なのは自分の考え方であろう。

晴美はこれ以降、志向する「純文学小説」を書くことに重点をおき、二年後には、自らが好きだという『蘭を焼く』や『吊橋のある駅』という作品を発表する。

同時に『遠い声』『余白の春』という伝記小説の代表作も生まれる。難しく、世にたやすくは受け入れられずとも、書く価値のあることに全身全霊をかけて挑戦した結果である。

書きながら、晴美は自分の運命を決めたといえよう。